



園塵始牧



岡屋牧の舊蹟と今比平野村なる岡谷の地あり是喜式
小其名を記せるや古書に見えざる創あるをき抑牧の
馬城なり或は馬置又ハ馬飼の約言なりとを謂ふ共ハ
原野ハ馬を放ち飼ふ處なる義ハ違ハざる可し御紀を
按るハ文武天皇の四年ハ諸國ハ牧地を定めて牛馬を
放飼し給ふと謂ふと有る後ハ御代々々毎年の
八月ハ其駒を貢らし天皇紫宸殿ハ出御して觀覽し
坐すを駒牽と謂ふ上卿解文を奏し公卿等ハ御馬を賜

ひ又引分使として仙院東宮を奉らせ給ふ式有る貞
観七年十二月は信濃國の勅使牧の駒を八月廿九日
貢すを今より十五日は定めしを制てられしより以
來延喜の頃の其定なり。その後より御國忌を避て十六
日不改むとて此勅使御牧武藏は四甲斐は三上野は
九信濃は十六有る各其日を別し貢す來しを下す
ての代より他國のハ皆廢きて十六日の式は行われ
たる由公事根元不記さす。往昔此國の馬は特不駿
逸きて愛重されし事ハ其牧の名とて雲上より高
く聞えて歌にも多く詠れたるを以て知らるるは尚

御牧此外不私の牧も多かりけむ文治の頃ハ馬寮は
領と謂ふる二十八所有り又十九牧司あり謂ふを置れ
し。不てハ推測る可し其中ハ岡屋牧ハ治承四年ハ諏訪
の社領ハ附られしより以來駒牽の外ハ諸の公役を免
る。是より專神事を勤むつる事等ハ代々此文書に記
し傳へたり。斯て其名の岡屋を或ハ岡仁谷又ハ岡野
を種々不記し歌にもをかたも詠む近世ハ岡庭と
書る物も有る。其代々ハ轉訛又ハ俚俗の稱呼ハ隨へ
るなる可し。是も正しくハ袁加能耶と唱ふる。古
今世中ても變らざるあり。此里の伊那郡ハ通ふ街道よ

己西方の小部澤と謂ふ原野有己其處の小祠有己昔よ
己馬神と稱へて農家の馬を飼ふ者の毎年正月二日小
己鞍をく美しく飾りて此神に詣る例あり己近く二
十年餘己先づ頃より何時と無く廢道來て今己然る事
己絶ぬ己や老人の言傳ふる己々古國司牧監等此處
己臨きて牧駒此良否を檢印署帳せ己蹟をらむと謂へ
己佐久郡なと此御牧の地小駒形社と謂ふ己多く存ま
る己皆同一類ある可己を己此邊小ませく己原垣外な
己の字ある己牧己縁有る地をらむ歟如斯正己此舊蹟
己時世の遷變る己か己知る人無く成果むらむを惜

して今般里人等相議して元の郡主なる正五位諏訪子
爵君に請申して貞治の歌合に駒牽の歌を書し給へる
を石碑に鐫て千代迄朽せぬ跡に標識を殘し置むとす
るをよるこひて

長々一代に傳へる山鳥此まのやの牧乃

あとまはふら

此御牧の縁故を考記と可き旨囑託られたるを素
よとある筋小を委しむらぬ身此己を負氣無けは
とを奉仕る諏訪神社に時なる由縁さへ有るを
辭にあらて彼是の書等よを見出づる一二を據記

一ぬ漏脱ぬるふしの多うらむを識者此補ひ給
へむあともと候つと云爾

明治三十二年十二月 正七位岩本尚賢

年中行事歌合 抄録

二十四番

右 信濃勅使駒引

ひきこけを^こを^こ屋ふたち一あら駒^これ見^これぬ袖^こふか
やろきやせ舞

判詞 畧

右を八月十五日を^この^こて^こ此^こす^こき^この^こひ^こま^こを^こた^こて^こ
つる^こあり^こを^こか^こや^この^こま^こた^こは^こ此^こ中^こふ^こて^こ侍^こる^こよ^こや^こ六^こ十^こ疋^こ
の^こよ^こ一^こ見^こえ^こ侍^こり^こき^こ大^こう^こと^こ昔^この^こま^こへ^こく^こ月^こ日^こを^こと^こも^こさ^こた^こ
む^こる^こ事^この^こた^こく^こて^こ國^こ々^こよ^こり^こ御^こ馬^こ數^こ百^こ疋^こま^こい^こる^こ事^こふ^こて^こ侍^こ
ま^こい^こは^これ^こも^こや^こり^こに^こあ^こる^こし^こ申^こか^こと^こ一

末二

貞治五年十二月二十日

作者 宗久 筑紫僧

詞書 關白良基公 二條殿 餘八畧

公事根元 抄録

八月

駒牽 十六日駒牽の外に近代にハ逗留の由あり
ふふを信濃の勅使牧の駒を奉る六十疋ありまとい十
五日より侍見しつとハ朱雀院に御國忌ふあふふふよ
て十六日よたさる天皇南殿ハ出御ありて御覽す上卿
御馬の解文を奏す事として公卿以下次第ハ御馬を給
ふる馬れさしつるをせりて御前よりして一拜を取
のこし此御馬を引分の使として次將をきて院東宮を
と然るへき所々へよいる 下畧

年中行事歌合ノ詞ハ公事根元ニ據リテ記サレタル
由ナレハ参照ノ為ニ記ス

西宮記江家次第等ニモ記事有レトモ畧ス
以上ハ碑面ノ歌ノ出所ヲ考證ス

延喜式卷第四十八 抄録

左馬寮 右馬寮
准之

御牧 中畧

信濃國

山鹿牧 塩原牧 岡屋牧 下畧計十六牧

古諸牧駒者每年九月十日國司與牧監若別當人等信濃甲斐
上野三國任牧監武藏任別當臨牧檢印共署其帳簡繫齒四歲以上可堪
用者調良明年八月附牧監等貢上若不中貢者便充驛傳
馬下畧

凡年貢御馬中畧信濃國八十疋諸牧六十疋望月牧北疋

吾妻鏡卷一抄錄

治承四庚子九月十日甲斐國源氏武田太郎信義一條次郎
忠賴以下聞石橋合戰事奉尋武衛欲參向于駿河國而平
氏方人等在信濃國云々仍先發向彼國去夜止宿于諏方

上宮庵澤之邊及深更青女一人來于一條次郎忠賴之陣
稱有可申事忠賴乍怪招于火爐頭謁之女云吾者當宮大
祝篤光妻也為夫之使參來篤光申源家御祈禱為抽丹誠
參籠社頭既三箇日不出里亭爰只今夢想梶葉文直垂駕
葦毛馬之勇士一騎西方揚鞭畢是偏大明神之所示給也
何無其恃哉覺之後雖可令參啓侍社頭之間令著進云々
忠賴殊信仰自末出野太刀一腰腹卷一領與彼妻依此告
則出陣襲到平氏方人管冠者伊那郡大田切鄉之城冠者
聞之未戰放火於館自殺之間各陣于根上河原相議云去
夜有祝夢想今思管冠者滅亡預明神之罰歟然者奉寄附

田園於兩社追可申事由於前武衛歟者皆不及異議召執
筆令書寄進狀上宮分當國平出宮處兩鄉也下宮分龍野
一鄉也而筆者誤書加岡仁谷鄉此名字無人未覺悟稱不
可然由再三雖令書改每度載兩鄉名字之間任其旨訖相
尋古老之處号岡仁谷之所在之者信義忠賴等拊掌上下
宮不可有勝劣之神慮既揭焉彌催強盛信帰敬禮拜

同卷六 抄錄

文治二年三月十二日 中畧

注進三箇國莊々之事 下總信濃越後等之國々注文
中畧

信濃國 中畧

左馬寮領

笠原御牧 宮所 平井豆 岡屋 平野

下畧
計廿八所

按ニ平野若ノハ立野ノ誤ナラン歟

諏訪神社 下社 古文書四通

諏訪下宮領岡野立野兩村左馬寮使新儀非法事寮頭へ
所被申也其間止使狼籍可令安堵百姓之状依仰下知如
件

承久元年十一月十九日 右京權大夫平 在判

左馬寮下

信濃國十九牧司事

可早停止新儀任先例以立野岡野兩牧如元為諏訪
社下宮社領事

右件兩牧者治承年中之比被寄進彼社領以降代々有限
駒牽役之外一向為社領既四十餘廻之間更無違乱之處
自去年秋之比俄被准自餘牧之由社司訴申之尤以不便
者早停止新儀任先例彼兩牧永代為神領駒引役之外一
向可令奉免之狀所 仰如件以下

承久二年七月廿五日

頭藤原朝臣

在判

當國十九牧之内辰野岡野兩牧事

右洞院家補任狀御吹舉帶之就于申成將軍家御教書并
左馬頭殿御教書守護方施行守護代催促狀被成於牧々
之間遂入部檢注之處於兩牧者諏方下社為神領治承々
久兩通御寄進狀仁寮家御公事被免除之間上古以來無
勤仕之例之由自社家被申之旨本家御方捧注進之處差
下十九牧奉行之上者宜為雜掌之素意之由依被仰下寮
家課役 神慮奉免者也向後駒引役初任檢注役等有無
社家進退且者天下泰平本家息災御祈禱可令致精誠給
之狀如件

貞治六年卯月十三日

十九牧大使幸辭 在判

信濃國諏方下宮社領岡屋辰野御牧事依為神領自寮家於駒牽役并國役雜事等者所被免除社家支證之狀明鏡也依之任先例所奉免社家也依為後證之狀如件

至德二年六月廿五日

修理亮 在判

諏方大祝殿

諏訪神社 上社 武田氏文書 抄錄

信玄判

諏方下社祭祀數年退轉之分今茲永祿八年 乙丑 十一月朔日令再興加下知次第

一 正月二日之祭禮岡之屋辰野兩鄉より費用出合相勤

候由先例如此候處ニ辰野鄉 總領分 庶子分 より無沙汰因茲

怠慢自由之至候向後者如前々辰野鄉之百姓等岡屋

之百姓同前より無疎畧可相勤然者大突飯小突飯酒肴

ひきこさめちとまのひきおとーかいふらひ等分豐

年凶年無陵夷可相勤之事

以下畧 末文二

官奉行

竹居祝

大和監物

高木喜兵衛尉

辰野傳兵衛尉

竹居宮内丞

諏方刑部古衛門尉

以上ハ岡屋牧ニ關ル文書ヲ抄出ス

追加

平野村大字岡谷小字小部澤鎮座

無格社小部澤社

創始ノ年月詳ナラス牧場守護ノ神ナリト謂フ

九

古昔ハ壯麗ノ社殿舞屋等有リシカ寛政年中ニ焼失
ノ後ハ假宮ニテ茅葺ノ小社玉垣鳥居等現存セリ
祭日ハ二月十二日古ハ此日商賈ノ輩社頭ニ集リテ
馬ノ口繩ヲ賣ルニ購フ者多カリシ由正月二日ニ馬
ヲ牽テ参リシ事ハ本文ノ如シ舊高島藩ヨリモ乘馬
ヲ牽カル、例ナリシカ寛政焼亡ノ後數年ノ間ハ社
モ無カリシニ因テ其事止ミタリ
社地ハ四反四畝拾六步有リシカ維新ノ始上地トナ
リテ現在ノ境内地ハ壹反四畝拾六步ナリ今般ノ石
碑ハ此ノ社地ニ建ルナリ

岡谷牧

正五位 源房忠元

大教正 小山 進

いこいふ宮内侍牧を奉るるれを子町の小田小あきゆをふく

高橋良休

夢をいふ麻毛の月毛もるるつらむを、やふをふくあはれゆ

大岩昌臧

+

いこいふ宮内侍牧を奉るるれを子町の小田小あきゆをふく

七十二

笹井惟善

いこいふ宮内侍牧を奉るるれを子町の小田小あきゆをふく

浅川 温

いこいふ宮内侍牧を奉るるれを子町の小田小あきゆをふく

増田守伝

いこいふ宮内侍牧を奉るるれを子町の小田小あきゆをふく

増田重義

いこいふ宮内侍牧を奉るるれを子町の小田小あきゆをふく

坂井義和

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

増田義史

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

杉林為秋

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

園田権吉郎

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

寺村安憲

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

久保田正英

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

横内重安

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

池内正洋

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

藤江正明

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

横内明壽

あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜あつたけなち〜

出格茂平

とくつたつてくたふまをけいせんあゝ馬屋のねとくたつてつと

奥平井持廣

あつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつて

岩間由伝

あつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつて

清水純次郎

あつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつて

三浦義道

あつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつて

浅井小終

あつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつて

百瀬千代

あつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつて

河野通重

あつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつて

清水義春

あつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつて

今泉親光

あつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつてつたつて

川船吉純

圖の右はすねのあし約たけきくえいひくまふかくくえい

樋口雲嶽

すねのあしをくえいひくまふかくくえいひくまふかくくえい

右取原港部

くえいひくまふかくくえいひくまふかくくえいひくまふかく

後八位 矢島正守

あし約たけきくえいひくまふかくくえいひくまふかくくえい

小中啓太郎

圖の右はすねのあし約たけきくえいひくまふかくくえい

増津門也

すねのあしをくえいひくまふかくくえいひくまふかくくえい

右田 岩

あし約たけきくえいひくまふかくくえいひくまふかくくえい

岩波沖人

くえいひくまふかくくえいひくまふかくくえいひくまふかく

井手宗孝

すねのあしをくえいひくまふかくくえいひくまふかくくえい

杖 守本

圖の右はすねのあし約たけきくえいひくまふかくくえい

矢島尚文

たつては月老のくさるゝふらふらとわのぬきをいふたつゝとわ

源清三平

馬のまはしとわのぬきをいふたつゝとわ

菅沼 屯

一ちかんとく一國屋の物仕をたう一今の時代はも少くもぬきをい

梶井保之

論のまはしとわのぬきをいふたつゝとわ

増澤聲雄

くさるゝふらふらとわのぬきをいふたつゝとわ

山田正倫

くさるゝふらふらとわのぬきをいふたつゝとわ

山田良輔

くさるゝふらふらとわのぬきをいふたつゝとわ

中島養重

くさるゝふらふらとわのぬきをいふたつゝとわ

河西清吉

くさるゝふらふらとわのぬきをいふたつゝとわ

武居光久

くさるゝふらふらとわのぬきをいふたつゝとわ

今井養源

暗戸のまじりて子銀のれぬ相
 きたまひ指つりの夫の根石
 佐の男の秘をさす 乳 産
 妾の舎たらんとの命も去んとして
 籠の鶴鶴の志何ぞ終わし
 人あしはれれ住居の冬去りし
 梅の花も折り あり たり
 空月の終りきたる 雨のあは
 走く 箸く 刀根の塔水
 いふせん道入好月の又ひる

胸のくもりをり 晴る 如く
 ぼろろの花まの雪の片やうらり
 空の二飛の取 襟のうらやまき
 睡屋のうら 爛るもたす 涙のうら
 ちのりの村のぬけ 暮り 時
 淫連絶ふちりし 切ぬきひりし
 よの土馬の 語 ころもき 海
 嫁礼のたしけり 事い 捨るれし
 閑ろろろろろ 中めぬ 致言
 とつろろろろ 正變 踊りの 吟安

英甫 凍湖 務策 四娘 因静 紅梳 喃史 柳郭 五季 玄井

三
 たりき 痴を 河海より 人
 いたまの 元より 白 山
 不 留 氣 果 不 塔 骨 骨 骨
 現 象 面 相 面 相 面 相
 道 可 合 聲 高 低 中
 勢 本 中 門 道 入 入 入 入
 悟 之 之 之 之 之 之 之
 あり 画 小 好 好 好 好 好
 とき とき 和 吉 の 布 布 布 布
 故 屋 五 三 月 申 瑞 祥 比 也 也

可 仙 浮 山 山 道 全 谷 天 經 正 梅 漱 石 共 梅 三 玉 吉 轉

瘴の 熱の さま 々々 明 々 々々
 ころろ 暮た 魔 陰 の 弓 の 五 人 張
 古い い い い い い ぬ 来 号
 里の 古 地 子 中 々 々 々 々 々 々 付
 中々 古の 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 石 經 の 道 若 海 々 長 宗 々
 採 精 の 名 を 行 つ 々 々 々 々 々
 身 結 藤 山 机 の 塵 山 拂 山 子 々
 吉 々 々 々 清 々 々 々 々 々 々 々 々
 孫 五 々 々 の 明 々 々 々 々 々 々 々

可 仙 浮 山 山 道 全 谷 天 經 正 梅 漱 石 共 梅 三 玉 吉 轉

宗やかくらん物左の袖
 殺あゝる牛の車のはうとくは
 所うあよる 波さきの色
 金つるを垣出の島のアヤヤしそ
 けつと若火のくつる 硝子
 いさよひの雲のたかなるちきれ雲
 つれきせよと唱えさのそく
 俯る襟のあやうくうけあし
 小森結結小耳よせろと
 昔あきのわか物一交の二世帯

芦月
 素梁
 新子
 川樂
 珠莊
 倭山
 紅電
 菱澤
 喜龜
 如佛

宗と素人の事いよと
 素命結さきつたあゝる皆結と
 法華を仰ぐ懐柔の果
 とま中なる所自くつりの白のたま
 杖のよとくく手のひくくは汗
 紗をか薫結標実ふあうと
 帯串けりつたつとあゝる
 小珠より廣き分限結外標
 汐のさあむ反標の自
 志つとくく雲垂るんきぬく

一玉
 梧蒼
 聲雨
 英山
 一舟
 小仙
 花山
 一鳳
 招壳
 玉朋

蕨もよそれとまの 只ふらん
 踏人のちきり 宛石の 隆あかり
 ひねりす 海と 水あらし
 ち
 わやい〜と 吹草葉の 投壺柑
 せうれ〜と ちよ ちよ ちよ ちよ
 酒合の 葉を 巻く ちよ ちよ ちよ
 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 水海に 残る 富谷の 月と 花
 系引 業の ちよ 長き 春
 入亭

湯尾

初途 自由の ちよ ちよ ちよ
 馬の ちよ 鼻の ちよ ちよ ちよ
 ねの ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 馬の ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 本馬 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ
 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

武蔵

廿
 只
 只
 只
 只
 只
 只
 只

情こゝやいなきつゝのちり約
 鞆おけいぬく約やふき証
 約迄本昔のうけ片一自譜々
 岳を真こころもたせ夏本立
 立あり物考約や字の品
 のりそりの馬人を以てま行か
 約引やかぬり鞆も本交驛
 こころを留ふりぬの約や本の子
 山珠
 約引やいこゝろり結業所付
 山珠
 約引やいこゝろり結業所付
 山珠
 約引やいこゝろり結業所付
 山珠

相葉や馬不名のり自夜下
 送外
 善ゆふ後をふり世々ぬの馬
 松津
 夏茶や川をふりぬ馬の昔
 尾張
 矣すも小馬の出を川小素下
 羽海
 人心川を約ふりぬり
 二巻
 有行やぬり約のち一橋一
 川涯
 約引やまぬやのさるれ整男
 廿朝
 本多りの曠く一きや約迄
 秀石

時々くや花のうらみは 湯のそとより

三河

いさやうのうらみは 湯のそとより

吉江

いさやうのうらみは 湯のそとより

馬のそとより 湯のそとより

湯のそとより 湯のそとより

三河

湯のそとより 湯のそとより

湯のそとより 湯のそとより

引水のうらみは 湯のそとより

甲斐

上弦の月より 湯のそとより

引水のうらみは 湯のそとより

馬の背も 湯のそとより

湯のそとより 湯のそとより

湯のそとより 湯のそとより

湯のそとより 湯のそとより

湯のそとより 湯のそとより

伊豆

約引の約よく清水う丸 三友

お松

約引の道く馬はけり 秀暖

上中

誦出中約引新中敷の漢 香山

葉と約不き世々中けハ清水如 唯琴

若夜

約引不日よりうたぬ 約 迄 賞素

下路

約引中附子宮谷のくろくはる 迄 史

昔

小春の日中門ふ前かぐつたき 江 二

隆前

隆中

秋立中よきよき 牧の馬 半水

羽後

約引中音不森如のく 為り 唯風

水よき馬よき 牧の秋 貞静

若夜

約引のたき 為り 不破の笑 梅 旨

若夜

約引をよけし通すや里の人 晴雲

約引や自らさくくわいさき 文規

いゝ谷屋一秋の雪や負馬 英策

約引や洗馬ふゆりとはくすり 丈苞

加賀

馬不鞭むいさきうと蒼ふり 甫立

月空のふりほりれと約迄 招号

祇中

善治やそなたさゆく馬の耳 笠山

馬不中々志りの系共々田極か 友和

廿五

能登

引系了約をくほり月明り 三宮

近江

約引や都ふちうき 茶の心 吳嶽

伊勢

引系約やうらふの海 月 耕雨

招伊

遠坂のうらやま 言 約迄 松年

英徳

約引や 約引 都 入 蒼庵

播戸

近海を伝ふる中京の光澤 鏡花

つたわかれて 剛くふるや 花雪共 笠雅

梅子

思れう 跡すや 海の端 あり 静月

いふくくや 牧場のまゝ 秋の暮 玉芝

あふくく 思ふや 月毛の海 秋 花雪

美佐

物衣ふく 子たのむや 梅のき 華花

下法

馬ふの 聲吉の 志たの 十きん取 士徳

物引や 月り 露ふま 古衣 菅溪

伊藤

貸馬の 車も 跡る 彼岸 秋 菊曉

梅中

あふくく ぬき 谷の 月毛 下 春雪

伯耆

初鼓の ころ 東方の 春 春雪 融水

率く 海山 月毛 下 西の 春雪 卓左

藤戸

かゝる馬の群を多岐や馬の道

梅香

佐藤

馬引や馬の群を多岐や馬の道

凌冬

馬引や馬の群を多岐や馬の道

帆味

馬引や馬の群を多岐や馬の道

雪海

馬引や馬の群を多岐や馬の道

蒼山

馬引や馬の群を多岐や馬の道

蒼碧

馬引や馬の群を多岐や馬の道

十雨

馬引や馬の群を多岐や馬の道

松里

馬引や馬の群を多岐や馬の道

真月

馬引や馬の群を多岐や馬の道

楊柳

馬引や馬の群を多岐や馬の道

竹仙

馬引や馬の群を多岐や馬の道

真松

馬引や馬の群を多岐や馬の道

厚儀

馬引や馬の群を多岐や馬の道

對山

馬引や馬の群を多岐や馬の道

白月

馬引や馬の群を多岐や馬の道

鹿毛

馬引や馬の群を多岐や馬の道

雨柳

馬引や馬の群を多岐や馬の道

雪高

清濁の目の老くも木下雲
 秋意やりの不 終れぬ言の終
 明合す牧場の 濁や々さの霧
 濁引ふ穀すつせん又す竹
 濁引のりくハ只の男く九
 曉換の若くハ不 隆く濁 途
 菴芒や富若の 牧の咄 跡
 濁引の神もあひく やくよの 風
 夏山や人むらり うれ 故ぬ馬
 山 仙臺 紫翠 外 竹 翠 柳 高 澗 美

たくすき身を 濁引も 嬉しくり
 濁引や同屋の 又字のかうり 笠
 よい春を馬も 産せそ 三ヶ日
 山の林のつた 中うん 春の馬
 空井すく 雲く 霧く 濁 途
 濁引の 甲ふや ちふくハ 水くハ 水
 いくくハ 牧の 申うや 春剛草
 甲の 雲の 濁や 富若の 牧の 空
 尾さくも 心の ちよ 孤傍の 濁
 月 都 法 相 紅 梅 天 玉 常
 如 麦 湖 陰 松 家 龍 人 重

馬ふあうりふけり枯木ふかりり
言はゆや天龍川ふのぼろる 露
馬心 取ふ付たやうへ 柳 楊
引く釣の足際 ともや 雲の峰
いきま へ ぬく 釣や 秋の 著
馬のふを 雪のうら ちつめ 冬 籠
烏帽子 着た人の 膝 釣 近
とれ とも 馬の肥た 露 月 哉
釣引 不同はん 狂 流の 月 の 磯
一 華
何 人
云 玉
非 人
麻 葉
空 湖
勢 衆
依 山
憂 山

共先

馬初や へ の白入 馬の 跡
青神の 系 へ へ や けたる 馬
楯の 火ふ 馬の 顔 出 十住 居 け
個ふ 馬の 心 へ へ や 籠 子 道
馬士の 女 心 辭 官 あり 三 十日
ちあ へ 子 先の へ へ き 楯 心 け
馬 渡ふ 湯 へ へ 入 たる 葛 蒲 哉
馬士の 由 結 花 へ へ や 花 の 香
釣つ ち 杭 を け あり 女 系 心
一 屋
紅 車
川 樂
一 二 三
新 子
風 来
青 葛
英 浦
木 人

長閑さふいそき合ふや牧の泊
 田原買つ馬ふりり女うぬ
 居くほゆ馬のあふりるのふ
 せせひ〜〜橋〜〜春の泊
 親馬はま〜〜引て馬り〜り
 三士の馬ふり〜〜日永か
 馬の河沿ふ小川や花葛蒲
 泊引や木着の棧〜〜春河
 い〜人のふを引出すや泊迎
 夏茶や中飼の馬の鈴控煙

所系
 有考
 舟旅
 浩浩
 風月
 希春
 湖月
 秋山
 冥柳
 京路

道〜〜喉や負の泊引で
 泊引や村〜〜近き〜〜人
 馬〜〜をさすい上た〜柳
 編つけた馬の別れたる小橋か
 立敷を〜〜泊のひ〜〜り
 馬も耳た〜〜さ〜〜響か〜
 泊引の出下橋や〜〜ぬ
 かくた人の顔出す馬や橋の是
 横りり馬い〜〜せ〜枯望か

松崖
 為玉
 遊樂
 ひふ〜
 雲海
 星雲
 夕〜の
 折銀
 枯南

又又馬の葉唱も秋也
 治まの清代のたや中酒色
 馬の葉ふさしを病や茶のむ
 幣まの馬の初り小向ひ
 酒引の早かきり言葉
 馬の葉の初り酒やきり
 酒引の河をさくちり
 秋まと思ひのちり
 葉初りさし右方ふむせり

菅城 橋屋 橋渡 柳山 三宅 真月 玉照 淡白 珠花

酒まの山を向ひ中本谷の秋
 葉の葉中馬ふおされり
 橋川中馬ふおされり
 馬の葉の初り枝豆
 葉の葉の初り
 酒の初り
 日暮り中馬の初り
 酒引の中馬の初り

福川 珠帝 可也 葵茶 積善 舞西 葛遊 子春 小宇

馬のふり箸石くち取く時留り

四好

新葺小宮く若たり約近

如先

約引やあうそ志の道中祀

格景

縮つけ約ひきうへる牧のあし

蓋字

約引や撥いうたぬうときき

金賀

あう約のつるけい成る柿山

玉吏

いそたもは新儀のあう中約近

龍骨

よい小若尾くや若の牧のあし

情剛

あううけく約いたわくや水石

漱石

種芒やあうそ宮の勅使の牧

西落

あう中圓答の牧ふいさも約

金谷

縮書やまより清き馬の教

魯山

系大まゆり馬場の花尾か

宋靜

約つたく木い別ふありまの山

素亮

約引の子繩のあう控う丸

梅高

馬のあう知はうりや大和引

如山

約引のまほのあうう液一如

素梁

改る牧の古蹟やすくれ茶

梅庭

泊引や津の浜坂の露時雨

如翠

三つた大牧の香畑のつる母や

一左

馬のつる水音採寸茂森

春光

新庄の馬あゝ里や松の香

花山

炭賣のつる母りりり枯樹系

枯年

馬のつる香く不二をたうわうり

樂樹

人の和馬の肥たり里の秋

吉野

泊引のあゝりりり海城の

義守

乗馬の口音あゝりりり

湖花

くつと虫鳴や富谷の牧の詠

翠澤

来吟ふ大馬はひたし今夏の川

子安

ぬく命ふ牧場の泊や五月晴

如佛

舟の馬ふ鞍くつ舟の舟舟

秋彦

舟の舟や帯し今馬の歌

康海

馬市の籠ふ子舟りりり

平山

いさききりりりりりりり

及上

泊引や舟の接りりりりり

千羽鶴

泊引の森をりりりりりり

玉波

馬飼りたき火おきうん秋空か
 彦坂の扉の戸あけを 駒 近
 駒又つゝあつゝの牧や 大和引
 雲借り駒のいぢゝゝ日如
 馬いさむさきの望面や 幸々
 馬の尾をむけいあけたり 春の雨
 駒さきふいたききあふや 牧の駒
 長深きや駒の遊言 折 驪り
 春風ふふかき馬のきんんか
 彦 山
 玉 泉
 湖 月
 珠 碎
 玉 泉
 湖 月
 正 偏
 和 甫
 玉 山
 湖 月
 珠 碎
 玉 泉
 湖 月

三

乗馬の子滝中かお中流代り春
 馬の子のいはいたけす 春 芝
 井近 岡谷の駒ふ幣 立了
 春すゝ馬の襟毛や 春の雪
 馬市やうららの 驪れ 松 桂
 雪汁を踏ぐよきすれ駒の尻淨
 秋まき駒の嘶いよ言
 馬はよ天鏡川や 夏 月
 春の日の懸け馬の紺の装束
 彦 山
 玉 泉
 湖 月
 珠 碎
 玉 泉
 湖 月
 正 偏
 和 甫
 玉 山
 湖 月
 珠 碎
 玉 泉
 湖 月

解のまゝ馬相好の女、う丸
赤桑の濃あけの浪や弱迄 代

園答

秋澄や宮若小亭き 弱の 子彦 春
馬の乳を故〜今片志や春の春 入
若井やきん小あふ二才 弱 江
唐踏々々々や牧の弱い〜 耕
秋風や京の出口の馬の乳 春川
志め〜け〜るの子彦や春の春 若昌
ね小馬繋々々 体志 春 子彦

志月〜〜弱の 風々や 若井系 希柳
豊年や肥馬通々 秋の 若 若 若
馬とわりの乳を〜あり 百日 紅 文林
弱引やそのよの白を 活あり 鹿 春山
馬通々 鳴る 子あり 夏あり 月 一玉
る小馬 繋々々 通々 若井系 梅池
春坂や秋の半小 弱 迄 五帝
春中 小嘆 若井系 若井系 牧の春 一
新蘭の繋り 小あふや馬の汗 有 一
馬下り〜若井系 若井系 若井系 一

約引のあやを吐けは嘘りのれ	約の毛の光澤吹出すやまのゆ	初言や馬の襟毛の若ふ姿	衆知や伝濃の約の結あやち	空さるるおのれいとくく競馬	清水あるゆふはたふゆるや廣りる	信馬楽をうたへたか屋の里新楽
結三	琴我	山名	雲井	芦月	一尾	可忍留
						碓房
						入字
						希心

明治三十三年三月

